

令和元年6月25日現在

機関番号：32690

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03588

研究課題名（和文）エルギン伯爵日英条約以降のスコットランド人の日本ディアスポラ（離散共同体）研究

研究課題名（英文）A Disspora Study of Scottish peoples in Japan after the Anglo Japanese Treaty by 8th Lord Elgin

研究代表者

北 政巳（KITA, MASAMI）

創価大学・公私立大学の部局等・非常勤講師

研究者番号：90063924

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）： 明治日本が技術と共に輸入したスコットランドの実学思想が日本の工業化の成功につながった点、フランスの学士院はフランス革命翌年に設立されたが、百科全書派はアダム・スミスに象徴されるようにスコットランド啓蒙主義とのつながり、さらに戦後日本ではアメリカ人マッカーサーの民主主義が評価されるが、彼自身はスコットランド移民の末裔であり、思想的にはアメリカ主義の信奉者でアメリカ主義の源泉はスコットランドの実学主義にあった。

つまり第8代エルギンが活躍した時代と、スコットランド人牧師・外交官・技師・教師のネットワークの中から近代世界が形成された歴史から、幕末から現代までの日本の社会発展も含まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代世界ではプロテスタントの登場が、中世の教会主体の経済倫理を脱却して、近代経済倫理、つまり資本主義の時代の幕を開いた。キリスト教文化圏外で、唯一日本だけが独自の価値観（大乘経）をもとに、歴史変化に対応して幕末明治の近代化・工業化に成功した。19世紀後半の欧米諸列強のアジアへの植民地侵略の中で、独自のダイナミズムで国家モデルを変更して近代化・工業化に成功した。第2次世界大戦で焦土と化しながらも復活した。さらに現実には地震、台風、津波等の天災に遭遇しながらも進化していく日本主義とは何かを解明したのが研究意図である。そこに第8代エルギン伯爵に象徴されるスコットランドの思想・哲学があげられる。

研究成果の概要（英文）： The success of Japanese development in 19th century and the recovery of her economy after the 2nd World War were the most concerned by Western historians. Because the other big nations of India and China were colonized but the small island of Far East could illustrate the success of prosperity in transforming the nation change. This paper was my invited presentation at the French Academy in May 2018 and introduced at Soka Economic Paper including the comments there.

In late 18th century, the philosopher of Scottish enlightenment and of French dictionary were quite close and became the leader of European intellectual movement. On the other hand, Japanese without being Christianized, attained the industrialization on the Mahayana Buddhism in 19th century again a dramatic recovery after the ashes of the 2nd World War again. Then, I paid an attention to know why Japanese could succeed.

研究分野：比較経済史

キーワード：幕末明治日本 スコットランド フランス 近代経済倫理 マッカーサー 大乘経

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

従来、わが国では幕末の西欧諸国との開国をめぐる過程について、最初に通商協定を締結したアメリカ、また封建時代から通商関係を確立・維持していたオランダに比して、他国(イギリス・ロシア・フランス・ドイツ)の情報は我が国文献には乏しく、本格的な研究はなされてこなかった。1858年の神奈川の安政5条約では、アメリカ、オランダに次いでロシア、イギリス、フランスが条約を調印した。日英通商条約がこの安政5条約で4番目であったことは、一部の識者を除いて、イギリスがどれほどアジア・極東に関心を持ち日本進出に興味を示していたかが日本人側に理解されていなかった証左ともいえる。

幕末神奈川5条約締結の中で、アメリカのハリスに比べて英国ジェームス・ブルース(第8代エルギン伯爵)は知られていない。エルギン伯爵は中国へアロー号事件処理に派遣されたが、日米条約締結を聞いて訪日した。彼の同郷の秘書オリファントも東禅寺事件以外、日本の文献では出てこない。しかし彼らの帰英後の講演、新聞・雑誌に刺激され、長崎の外商グラバー、J&M社、P&O社、明治政府第一号の御雇いプラントン等、スコットランド人宣教師・技師・教師・ジャーナリスト、商人が到来した。本研究はディアスポラ(離散共同体)から幕末明治の歴史を再検討する。

## 2. 研究の目的

本研究は2つの視点、わが国におけるスコットランド学の主張と、幕末明治のお雇い外国人研究のディアスポラ「離散共同体」論からの展開を目指し、具体的には以下の3点を研究する。

特に1850年代から70年代(中国の第2次アヘン戦争のアロー号事件、インドのセポイの反乱から明治維新前後)のアジアを視野に入れ、明治以降のスコットランド人の日本各地(長崎・函館・横浜・神戸)でのディアスポラ(離散共同体)活動を究明したい。

従来の御雇い外国人研究は日本文献が中心であり、御雇い外国人個人を対象としたもの、本研究の特色はスコットランド人のネットワークから幕末・明治初期のわが国(長崎・函館・横浜・神戸)に到来した商人・宣教師・技師・教師を体系的に把握する。御雇い[スコットランド]人が到来した経路には、(1)本国スコットランドから日本に直接の到来、(2)本国からアメリカを経由して到来、(3)インド・東南アジア・中国を経由して到来したグループがあるが、いずれの経路も母国スコットランドのビジネス(鉄道・造船・機械)に深く関連していた。第1グループの場合は、何のビジネスに関与していたかにも関心がある。また第2グループの研究は、最近ではアメリカ・カナダのスコットランド系歴史学者も関心を示している。第3グループの動きが未開拓であり、本研究の中心対象となる。具体的には、本国スコットランド各地からの出移民調査を中心に、各地に進出した企業・技師を調べ、それをインド・バンガラデッシュ・シンガポール・香港等に所蔵される新聞・資料と照合する。

第8代エルギン伯爵の日英条約締結にはじまるスコットランド人の日本でのディアスポラ(離散共同体)研究は、国際交流史から見た近代日本の研究としても学術界に貢献できると確信する。先ず横浜の開港資料館・神奈川県立博物館での研究を続けるが、1年目は特に1850年代のインドを中心に、2年目には特に1860年代タイ・ラオス・マレーシア等を中心に、3年目には1860年代のベトナムから中国・日本にかけてのスコットランド人の進出をも対象とする。具体的には、本国スコットランド各地での出移民調査を中心に、各地に進出した企業・技師を調べ、それを現地の研究機関での現地新聞・資料と照合する。

また本研究の斬新性は、大英帝国の1840-70年代アジア進出がスコットランド人商人や同系海運会社によって繋かれ、極東の日本までネットワークを拡張した歴史ダイナミズムを解明しようとする点にある。

また近年、ディアスポラからの経済史研究も展開され始め、2007年5月26日に創価大学で第76回社会経済史学会全国大会が行われ、共通論題で「社会経済発展とディアスポラ(離散共同体) - 情報・知識・技術伝達と労働力の局面から」が討議され、大会報告が『社会経済史学』第37巻合併号に収録された。ディアスポラは元来、ユダヤ人、アルメニア人等の古代に異国へ強制移住させられた抑圧民族の宗教・文化的伝統の「内向きの固持」に使われた言葉であったが、スコットランド学者が顕著な形で、イングランドに抑圧されたスコットランド民族が実学・科学教育で成功し、ダイナミックに大英帝国内で活躍する「外向きの進出」の姿にディアスポラ表現を用いた。事実、故郷を離れた海外在住のスコットランド人系学者が、S. Lamont, *When Scotland Ruled The World, the Story of the Golden Age of Genius, Creativity and Exploration*, Harper Collins 2001, A. Herman, *How the Scots Invented the Modern World*, Crown Publisher, NY, 2001. M. McLaren, *British India and British Scotland, 1780-1830*, Acron Press Univ. 2001, A. Herman, *The Scottish Enlightenment, The Scots' Invention of the World*, Fourth Estate, 2001. M. Fry, *The Scottish Empire*, Tuckwell Press, 2001, J. Buchan, *Capital of the Mind, How Edinburgh Changed the World*, J. Murray, 2003, J. Hunter, *Scottish Exodus, Travels, Among a Worldwide Clan*, Mainstream Publisher, 2005, K. MacCaskill & H. M. Cleith, *Global Scots*, Luath Press, 2005, B. Kay, *The Scottish World, A Journey into the Scottish Diaspora*, Mainstream Publisher, 2006等の著作が公刊され、さらに増加している。

また、スコットランド人のアジア・極東への活動にも関心が向けられている。ロンドン大学SOASのTom Tomlinson教授は2009年デリー大学でのアジア歴史家会議で「18世紀のスコ

ットランド人と東インド会社」を報告し、私は同セッションで 19 世紀のスコットランド人活動を扱った。既にカナダの UBC のレイ (W. D. Wray) 教授は、『4 世紀間のディアスポラ』(Diaspora Entrepreneurial Networks, E Four Century of History ed. by J. B. McCabe etc., 2005) の中で「17 世紀の日本人の東南アジア進出」を日本人で、ディアスポラの古典例としてあげる。またコーヘン(R. Cohen)教授は『グローバル・ディアスポラ』(Global Diasporas, 1997) の中で「第 2 次世界大戦後の日本商社の海外進出はディアスポラである」とみる。つまり海外では既にディアスポラ論からの経済史・経営史研究は認知されている。

そして私自身のスコットランド経済史・経営史を通じての西欧理解も、結局は、わが国の研究に欠けていた「外から見た幕末・明治の日本」や「世界経済の中の日本」にあり、集大成を目指す意味で、明治日本における外国人(大半がスコットランド人)が、どのようなかたちで繋がって来日し、また長崎、横浜、新潟、函館、神戸でつながっていたかを解明したい。

### 3. 研究の方法

2012 年にスコットランドのエディンバラ大学にディアスポラ・センターが設立され、旧友の T. Devine 教授 (To the Ends of the Earth, Scotland's Global Diaspora, 1750-2010, Smithsonian Books, 2011) が所長についた。その研究協力がえられることになった。

また研究遂行に際しては、40 年近い交流をしてきたグラスゴウ大学経済史講座の教授や同大学アーカイブの協力を得て未開拓の資料を集めるが、更に英国またアジア各地の博物館・資料館と交信し、1830 年代からのスコットランド人ディアスポラ情報を収集する。特にアジア各地、シンガポール、マレーシア、香港等の当時の新聞・外交文書も対象とする。国内は横浜の開港資料館・神奈川県立博物館を中心に、長崎や函館の博物館調査、また各地での地方史研究者とも交信して研究の深化を図る。また当時の日本で英字新聞も精査する。

具体的には、英国ロンドン大学 SOAS 教授 (Nish 教授)、グラスゴウ大学の経済史・経営史関係の学者 (A. Slaven 教授、F. Munro 教授、M. Moss 教授) 等との協力を通じて、英国のロンドンの公文書館や大英博物館に散在するスコットランド人の資料収集を進めた。次に、幕末時代に関する研究文献の吟味を行う。さらに見出されたスコットランド人企業・個人の名前を開港資料館等の資料との符号を図った。また横浜の開港資料館をはじめ P & O 社や NYK の資料館、また長崎・神戸・函館の歴史博物館についても研究調査を行った。資料館の知人、神戸、長崎、函館の地方歴史研究会の関係者とも人的交流があり、それを生かして新しい資料の発掘を行い、研究意義の公表の場とするよう努めた。

### 4. 研究成果

本補助金による研究初年度 (2015 年度) には、研究テーマである「エルギン伯爵日英条約以降のスコットランド人の日本ディアスポラ (離散共同体) 研究」の基本的方向性を構想するとともに、それまでの研究をまとめた『第八代エルギン伯爵と幕末日本——日英条約と日本でのスコットランド人ディアスポラ研究』を上梓した。拙著が公刊できたことにより、それまで日本語文献に無く、謎とされていた第八代エルギン伯爵、また彼の秘書オリファントと幕末日本との関係が明らかになった。内外の研究者からも様々なコメントをいただくとともに、とりわけ 2016 年 3 月に招聘を受け講演した中国・上海歴史アカデミー (中国近現代史講座) や南京大学西洋史大学院講座での関心の高さには驚くべきものがあつた。その他にも 2015 年 10 月には静岡県川勝平太知事の招請により、同県庁で「幕末明治初期の産業革命遺産とスコットランド人技師」のテーマで講演を行った。

以上のような国内外の研究者との交流も研究遂行上の励みとなり、本研究では、第 8 代エルギン伯爵の締結した日英通商条約以降の幕末明治に来日したスコットランド人の横浜、東京、神戸、大阪、函館、長崎での外国人居留地記録と、英国スコットランドでの資料と付き合い、彼らがどのような形で本国、インド、中国の居留地とつながっていたかをまとめた。特に鉄道、造船、海運ビジネスで活躍したスコットランド人のネットワークの解明をめざすことに力点を置いた。

また同時に幕末・明治初期に大きな影響を与え日本の工業化に貢献しながら、明治政府為政者の国家モデルの方針転換、つまり 1883 年頃からの日本の国家モデルが、当初の英国型市民国家モデルからドイツ型立憲君主型に変換される一方、時を同じくして、スコットランド人の幕末以降明治初期の多大な功績もなぜか日本史の記録から消されていった。たとえば、それを象徴する人物が、9 年間工部大学校 (東京大学前身) の都検 (校長) を勤め、日本の近代工業技術教育の父と評価されたスコットランド人技師ヘンリーダイアーである。彼に対する評価がないのは何故か。本研究を通して、今後解明すべきこうした新たな疑問も生じてきた。

いずれにせよ、2017 年 5 月にフランス学士院での講演でも明らかにしたが、本研究を通して、第 8 代エルギン伯爵が活躍した時代と、それに続くスコットランド人牧師・外交官・技師・教師のネットワークの中に、すなわち近代世界が形成された歴史の中に、日本の幕末から現代までの社会発展も含まれることを例証できた。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

KITA MASAMI: The Prosperity of British Empire through the Historical Research of Lord Elgin Family in 19th Century, 創価経済学論集、査読無、第 45 卷 1-4 号、2016.03、pp.73-89.

北政巳、明治期日本の産業革命遺産とスコットランド人技師・教師の貢献、創価経済学論集、査読無、第 46 卷 1-4 号、2017.03、pp.1-16.

KITA MASAMI: The Impact of British (Scottish) Influence of Technology and Business to China and Japan after India in the Late Nineteenth Century, 創価経済論集、査読無、第 47 卷 1-4 号、2018.03、pp.1-12.

KITA MASAMI: Japanese Ethics and Mahayana Buddhism A Qualitative Approach, 創価経済論集、査読無、第 48 卷 1-4 号、2019.03、pp.1-18.

〔学会発表〕(計 6 件)

KITA MASAMI: The Abridge of the prosperity of British Empire through the history of Lord Elgin family in 19th century, at *2015 Singapore Economic Review Conference*, 6<sup>th</sup> August 2015.

KITA MASAMI: The Role of 8<sup>th</sup> Lord Elgin in the British Imperialism to Asia (India, China and Japan), at *Shanghai Historical Academy*, 22<sup>nd</sup> March 2016.

KITA MASAMI: The Activity of the 8<sup>th</sup> Lord Elgin in Asia in late 19<sup>th</sup> Century, at *Western Historical Studies Society of Nanjing University*, 23<sup>rd</sup> March 2016.

KITA MASAMI: The Life of Henry Dyer, the first Principal of Tokyo University and the Father of Modern Technology in Japan, at *Hawaii University*, 18<sup>th</sup> July 2016 ( 招聘講演 ).

KITA MASAMI: The Impact of British (Scottish) Influence of technology and business to China and Japan after India in the late 19<sup>th</sup> Century, at *Singapore Economic Society*, August 2017.

KITA MASAMI: Japanese Ethics and Religion, at *Section of Economics and Ethics, French Academy*, May 2017 ( 招待講演 ).

〔図書〕(計 2 件)

北政巳、第八代エルギン伯爵と幕末日本 日英条約と日本でのスコットランド人ディアスポラ研究、文生書院、2015.6、270p.

KITA MASAMI: Steamship Competition in Asia in the Late Nineteenth Century: Britain and the United States, in: A.J.H. Latham, Heita Kawakatsu (ed.): *Asia and the History of the International Economy. Essays in Memory of Peter Mathias*, London/New York: Routledge, Chapter 9.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。